早稲田大学 オープンカレッジ　2022年10月15日

日本におけるキリスト教の風景

宣教・潜伏・発見・そして【寄藤 昂】

1．はじめに

1.1 世界遺産登録の概要

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」

本資産は，16世紀にキリスト教が大航海時代を背景に極東の国日本へ伝来し，その後の江戸幕府による禁教政策の中で「潜伏キリシタン」が密かにキリスト教への信仰を継続し，長崎と天草地方の各地において厳しい生活条件の下に，既存の社会・宗教と共生しつつ，独特の文化的伝統を育んだことを物語る貴重な証拠である。

潜伏キリシタンは、長崎と天草地方で小さな集落を形成して生き残ったが、そうした集落は海岸沿い 、又 は禁教時代に移住先となった離島に形成された。潜伏キリシタンの信仰は、一見すると日本の在来宗教のように映るが、キリスト教のエッセンスを維持した独特な宗教的伝統を生み、 2 世紀にわたって信仰を維持し禁教を生き抜いた。

1.2 構成資産

1 原城跡（南島原市）
2 平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳）（平戸市）
3 平戸の聖地と集落（中江ノ島）（ 平戸市）
4 天草の﨑津集落（熊本県天草市）
5 外海の出津集落（長崎市）
6 外海の大野集落（ 長崎市）
7 黒島の集落（佐世保市）
8 野崎島の集落跡（北松浦郡小値賀町）
9 頭ヶ島の集落（南松浦郡新上五島町）
10 久賀島の集落（五島市）
11 奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）（ 五島市）
12 大浦天主堂（長崎市）

No.3
No.2
平戸
No.8
野崎島
No.7
No.9
No.11
No.10
No.6
No.5
外海地方
No.12
島原
No.1
五島列島
天草
No.4
構成資産
離島への移住ルート

構成資産位置図

1.3 意義と背景

日本の世界文化遺産では「日本の近代化」に関するものとして

「富岡製糸場と絹産業遺産群」（2014）

「明治日本の産業革命遺産・・」（2015）

が先行して登録されていた。

日本側の思惑とは別に、ICOMOS の関心が「非西欧世界における近代化」にあったことは、これらの登録（承認）にも共通して窺える。

実は、対象とする「遺産」には原城址を除いて “潜伏期” の遺物は殆ど存在しない。また現在の日本においてキリスト教信者は国民の 1〜1.5 %に過ぎず、増加の傾向も見られない。

このような現実にも関わらず登録に至ったのは、キリスト教信者集団の２世紀に渡る「潜伏」と「復活」という出来事の衝撃の大きさと、対象の「信仰」が全てカトリックであり、様々な形でヨーロッパとの関わりが存在したことも決して無関係ではないと思われる。

1.4 ここでは「何」に注目するのか

布教と禁教、内外の政治的・経済的背景。

弾圧の諸相、「26聖人殉教」から「浦上四番崩れ」まで。

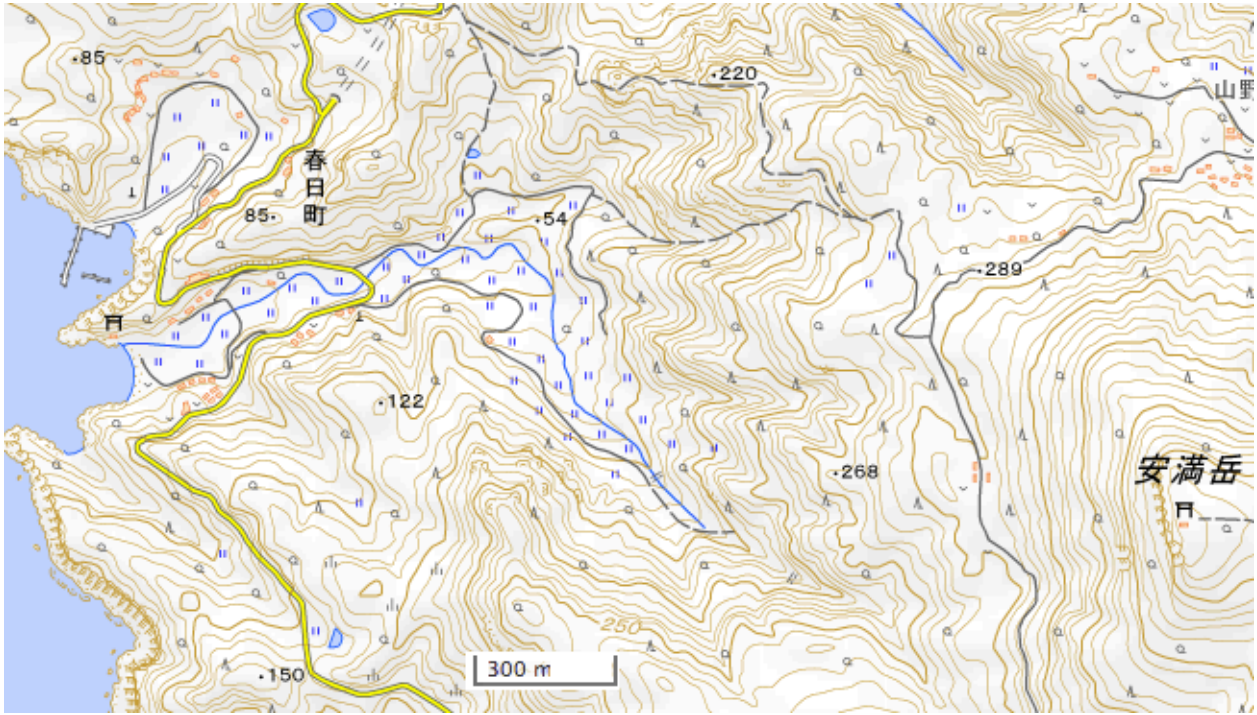
開国 -> 「信者発見」の衝撃とその後の展開。

文化遺産としての教会。

2 構成資産

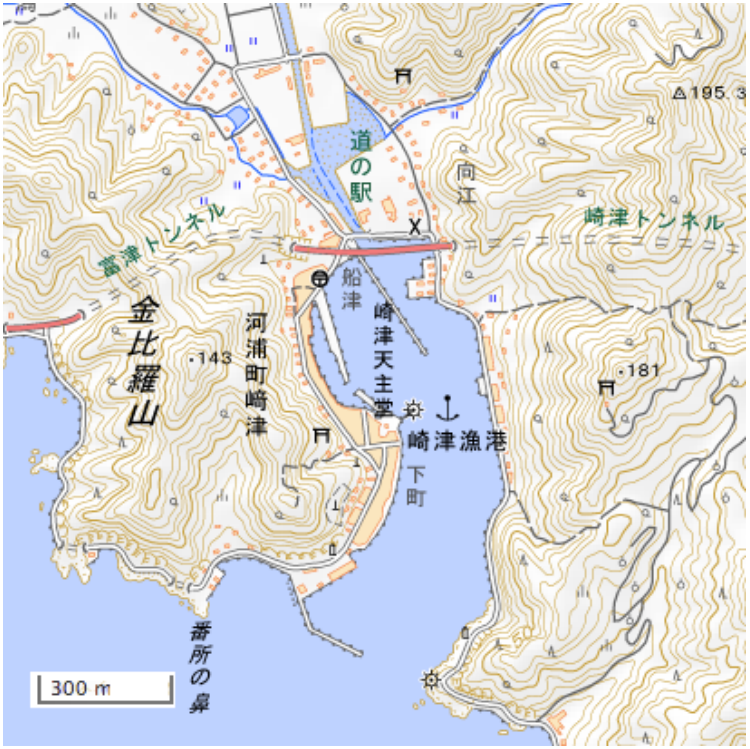
2.1 原城跡（長崎県南島原市）

2.2 平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳）（長崎県平戸市）



2.3 平戸の聖地と集落（中江ノ島）　（長崎県平戸市）

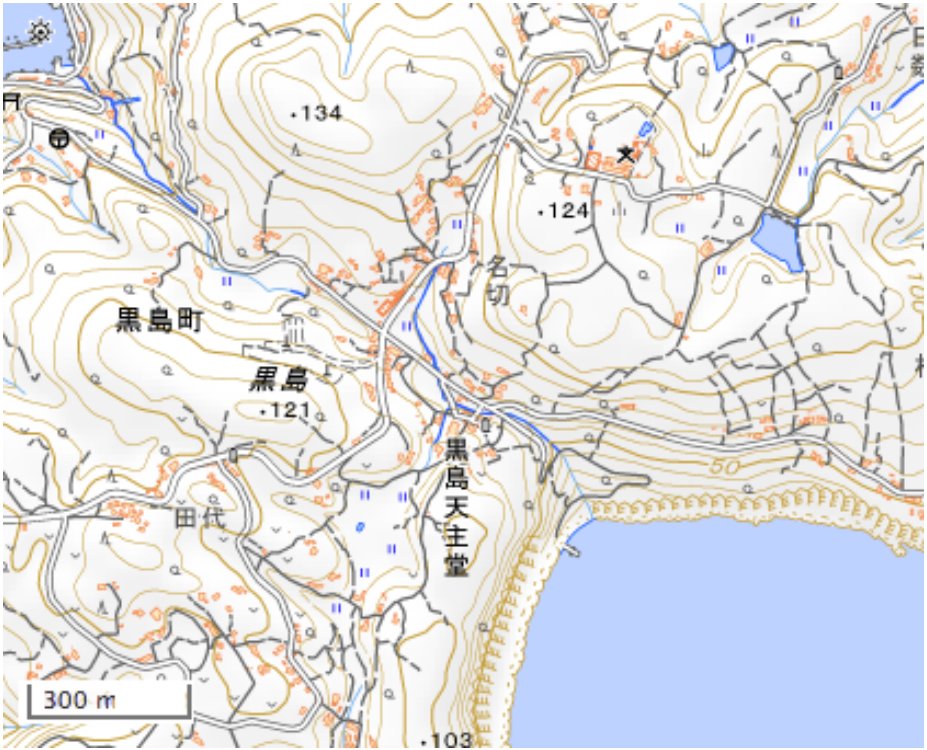
2.4 天草の崎津集落（熊本県天草市）



2.5 外海の出津集落（長崎県長崎市）

2.6 外海の大野集落（長崎県長崎市）

2.7 黒島の集落（長崎県佐世保市）

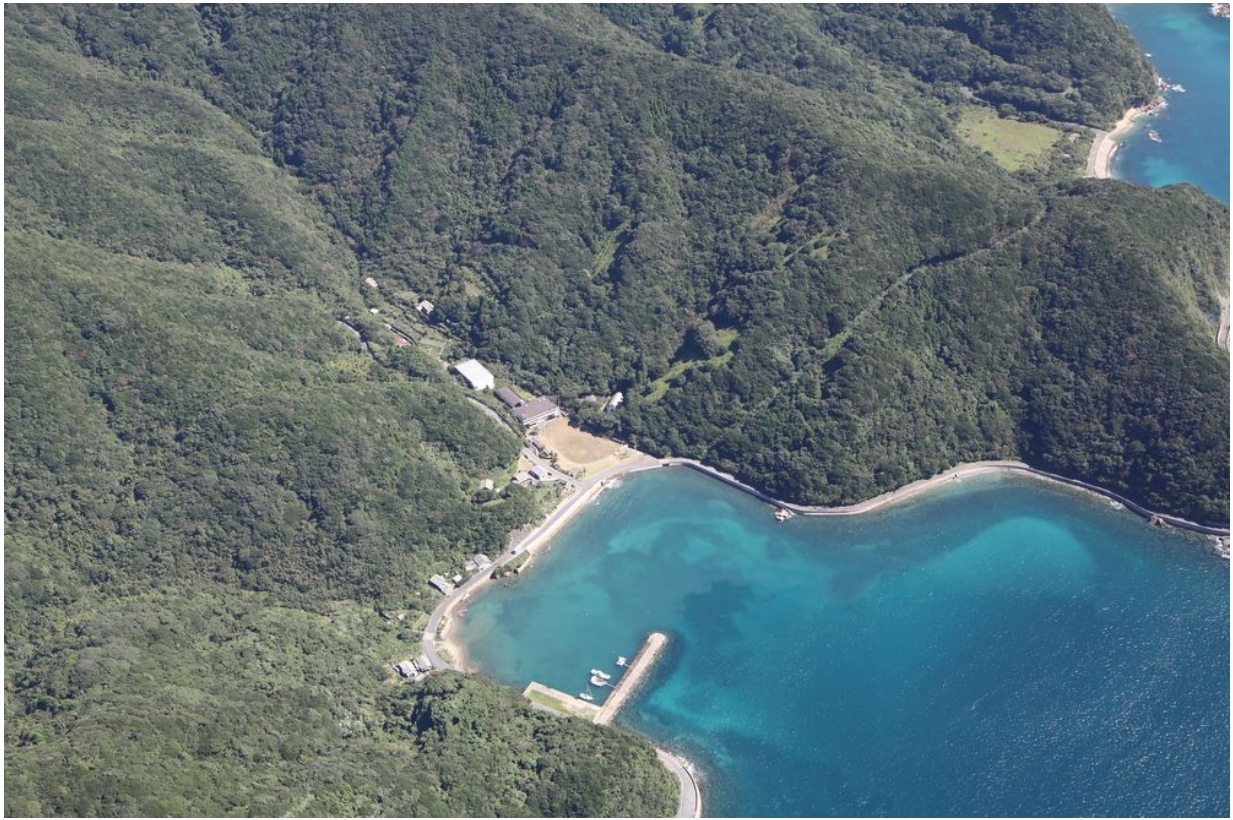


2.8 野崎島の集落跡（長崎県北松浦郡小値賀町）

2.9 頭ヶ島の集落（長崎県南松浦郡新上五島町）

2.10 久賀島の集落（長崎県五島市）

2.11 奈留島の江上集落(長崎県五島市)



2.12 大浦天主堂
（長崎県長崎市）

3．キリスト教の伝来・弾圧・復活

3.1 イエズス会は何故日本を目指したのか

イエズス会は1534年モンマルトルで発足、1540年にローマ法王によって認可された。

主宰者はイグナチウス・デ・ロヨラ（1491～1556）、

スペイン・バスク地方出身の貴族。

フランシスコ・ザビエル（1506～1552）も同じバスク地方の出身。1525年パリ大学に進み、そこでロヨラと出会った。

1534年、ロヨラ、ザビエル、他の７人でモンマルトルの聖堂で誓いを立てたのがイエズス会の始まりとなった。

特徴的理念は、貞潔、清貧、全世界への布教である。

イエズス会は、腐敗が指摘され宗教改革派の批判を受けていたカトリック内部からの改革の動きでもあった。

次の図は『紙本著色聖母子十五玄義・聖体秘跡図』（部分）

（重要文化財、京都大学総合博物館所蔵）

ロヨラ（左）とザビエル（右）

S·PIGNATIVS·
SOCIETATIS IESVS
S·MATTHIAS·
S·FRANCISCVS·
XAVERIVS·
S·LVCA

この頃ヨーロッパ北方からの宗教改革の動きが続き、カトリック（ローマ教会）は財政的危機を感じていた。

ローマ教会はスペイン、ポルトガルの両国王にヨーロッパ以外への布教を要請、両国も縄張りの拡張を目指して修道会・宣教師を支援した。

新興のイエズス会は「適応主義」などとのカトリック内部からの批判を受け、プロテスタント諸国との競争なども影響して18世紀には消滅状態に陥るが19世紀に復活、現在の上智大学を創設している。

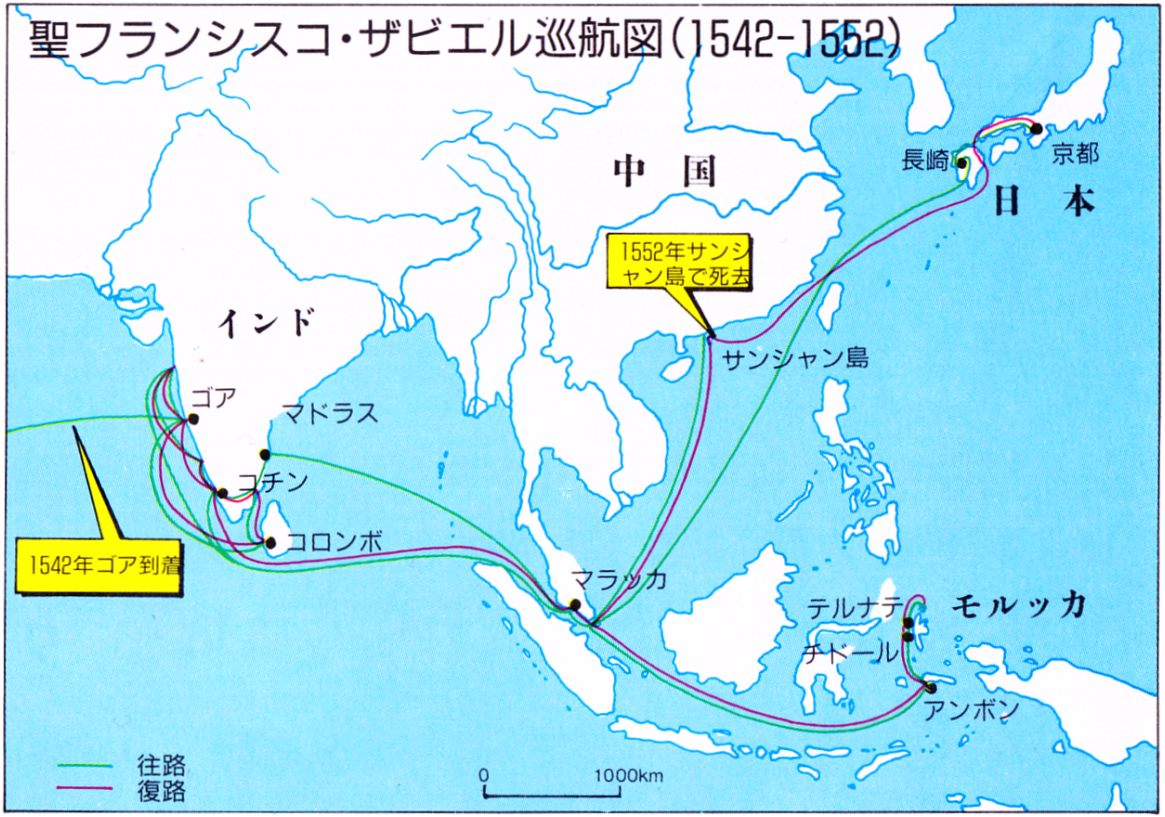
ザビエルは1540年ローマを出発、リスボン、モザンビークを経て1542年５月にインドのゴアに赴任。ゴアを拠点に活動した後の1549年４月、２人のイエズス会士、中国人、インド人、３人の日本人とともにゴアを出航、日本を目指した。

８月に薩摩半島に上陸、薩摩ー平戸ー山口を経て1551年１月に京都に入るが天皇、足利将軍との面会は叶わず平戸に戻った。

1551年４月に山口を再訪、大内氏から宣教の正式許可を得、住居として与えられた廃寺は最初の「教会」となった。

1551年末には鹿児島のベルナルド他３人の日本人青年を連れてゴアに戻り、ベルナルドはのちに日本最初のヨーロッパ留学生となった。

1552年中国での布教を目指して広東の上川島に渡るがそこで病没した。


聖フランシスコ・ザビエル巡航図(1542-1552)
中　国
日　本
インド
長崎
京都
1552年サンシャン島で死去
サンシャン島
ゴア
マドラス
コチン
コロンボ
1542年ゴア到着
マラッカ
テルナテ
モルッカ
チドール
アンボン
往路
復路
0
1000km

3.2 信長と秀吉

1477　応仁の乱が終結するが

　　その後も徳政一揆（1480）、山城国一揆(1485〜93)

1488　加賀の一向一揆が始まる(〜1580)

　　足利将軍家は存在したが、戦国時代の様相

1500　後土御門天皇崩御、葬儀も満足に行えず

1543　種子島に漂着したポルトガル人から鉄砲が伝わる

1549　フランシスコ・ザビエルら鹿児島に到着

1551　ザビエル上京、天皇に会うことはできず平戸に戻る。

1551　山口再訪。領主大内義隆から宣教の許可を得る。

1559　ヴィレラ京都に定住、宣教を開始

1560　将軍足利義輝より許可を得て土地・建物を購入

　　後にこの場所に南蛮寺（教会）建設（1576）

1560　桶狭間の戦いで織田信長が今川義元を破る

1563　結城山城守、高山飛騨守（右近の父）、大村純忠ら受洗
　　キリシタン大名の出現
1563　宣教師ルイス・フロイス来日
1565　２月、フロイス入洛、
1565　７月、天皇より宣教師追放の命令、堺に避難
1568　信長が足利義昭を奉じて上洛
1569　フロイス、信長から保護状を得る
1573　信長が足利義昭を河内へ追放、室町幕府滅亡

1576　有馬義貞、大友宗麟（1578）、受洗

1579　巡察師ヴァリニァーノ、来日

1582　天正少年遣欧使節出発、本能寺の変で織田信長没

1587　秀吉、伴天連追放令発布、高山右近改易

1588　京都・大坂の南蛮寺破却

1590　豊臣秀吉天下統一、天正の少年遣欧使節帰国

1591　ヴァリニァーノ、少年遣欧使節とともに秀吉に謁見

1592　秀吉、朝鮮出兵（〜1593）文禄の役

1593　マニラ総督の使節フランシスコ会士ペドロ・バプチスタ
　　来日、名護屋で秀吉に謁見

1594〜95　フランシスコ会士、京都に教会、病院を建設

1596　サン-フェリペ号事件
　　秀吉フランシスコ会宣教師ら捕縛

1597　講和交渉決裂、朝鮮出兵（〜1598年）慶長の役

1597　長崎西坂で26名が殉教（日本26聖人）

26聖人殉教は日本で最初の大規模な殉教であった。背景には「現地適応」を第一に考えて穏やかに布教するイエズス会とは異なり、フィリピンなどで「宗教的征服」を経験してきたフランシスコ会の言動に対する猜疑と反発があったと考えられる。また、サン・フェリペ号事件で匂わされた 実体的な「侵略」が、秀吉自身の朝鮮出兵と重ねて受け止められたことで、怒りが爆発したとも見られている。

翌1598年、豊臣秀吉は死去した。

LAUDATE
OMNES
DOMINUM
GENTES

3.3 徳川時代の弾圧と潜伏キリシタン

1600　関ヶ原の戦い

1602　ドミニコ会、アウグスチノ会が来日

1603　フランシスコ会宣教師ルイス・ソテロ来日

　　徳川家康・徳川秀忠に謁見

1603　ソテロ、伊達政宗との知遇を得て東北地方に布教開始

1612　家康、キリシタン禁教令を発布、各地の教会を破壊

1613　ソテロ、支倉常長ら慶長遣欧使節団ローマに出発

1614　全国に禁教令、宣教師および高山右近らマカオに追放

1616　秀忠、禁教を強化、徳川家康没

1619　京都の大殉教

　　続いて、長崎（1622）、江戸（1623）の大殉教

1622　ソテロ、長崎潜入を図り失敗、1624年肥前大村で殉教

1637　島原・天草一揆＝島原の乱（～1638）

　約35,000人が全滅したとされる。この戦闘にはオランダ船も参戦していた。

1638　宗門改め強化

1639　鎖国完成

キリシタンの逃亡・潜伏が本格化

1665　幕府、一万石以上の藩領に宗門改役設置

1669　幕府により唐銅版の踏み絵２０枚製作される

1671　幕府、宗旨人別帳を義務づける

幕末、浦上一番崩れ（1790）、同二番崩れ（1842）

三番崩れ（1856）

信者の移住

五島には1566年から修道士が派遣され、信者が生まれていたが、17世紀初頭には衰退していた。

1772年から大村藩と五島藩の取り決めによって大村藩領の「外海」から五島への移住が始まり、19世紀初頭まで続いた。

最終的に3000名に達したとされ、その多くが潜伏キリシタンであった。

世界遺産登録の黒島の集落、野崎島の集落跡、頭ヶ島の集落、久賀島の集落、奈留島の江上集落は、いずれも移住してきた人たちによるものである。

マリア観音像　17世紀？、白磁製

3.4 開国と信者発見、最後の弾圧

1858　修好通商条約（安政五カ国条約）締結、鎖国終了。

箱館、神奈川（横浜）、長崎、新潟、兵庫（神戸）の５港と東京、大坂の２都の開市が決定した。

長崎奉行、踏み絵の中止を宣言

1863　パリ外国宣教会のプティジャン神父長崎に到着

1865　長崎の南山手居留地内に大浦天主堂完成

プティジャン版、カトリック文書の秘密出版開始

聖教初学要理　1868年、ベルナール・プティジャン、木版（2012復刻

大浦天主堂事件

1865年４月、天主堂内で浦上信徒名乗り出る（旧信徒発見）

プティジャン神父からローマ教会に報告、大きな衝撃に。

以後、外海、五島、天草など他地区の信徒・指導者も教会を訪れ指導を願ったので、神父は密かに彼らを指導、彼らは村に帰り教えを伝えた。

当時教会はあくまでも在留外国人のもので、日本人への指導・布教は禁じられていた。

浦上四番崩れ

1867　浦上村の信徒が仏式の葬儀を拒否。

庄屋によって長崎奉行に届けられ、長崎奉行から幕府に報告。

7月14日の深夜、信者の集会を幕吏が急襲（浦上四番崩れ）

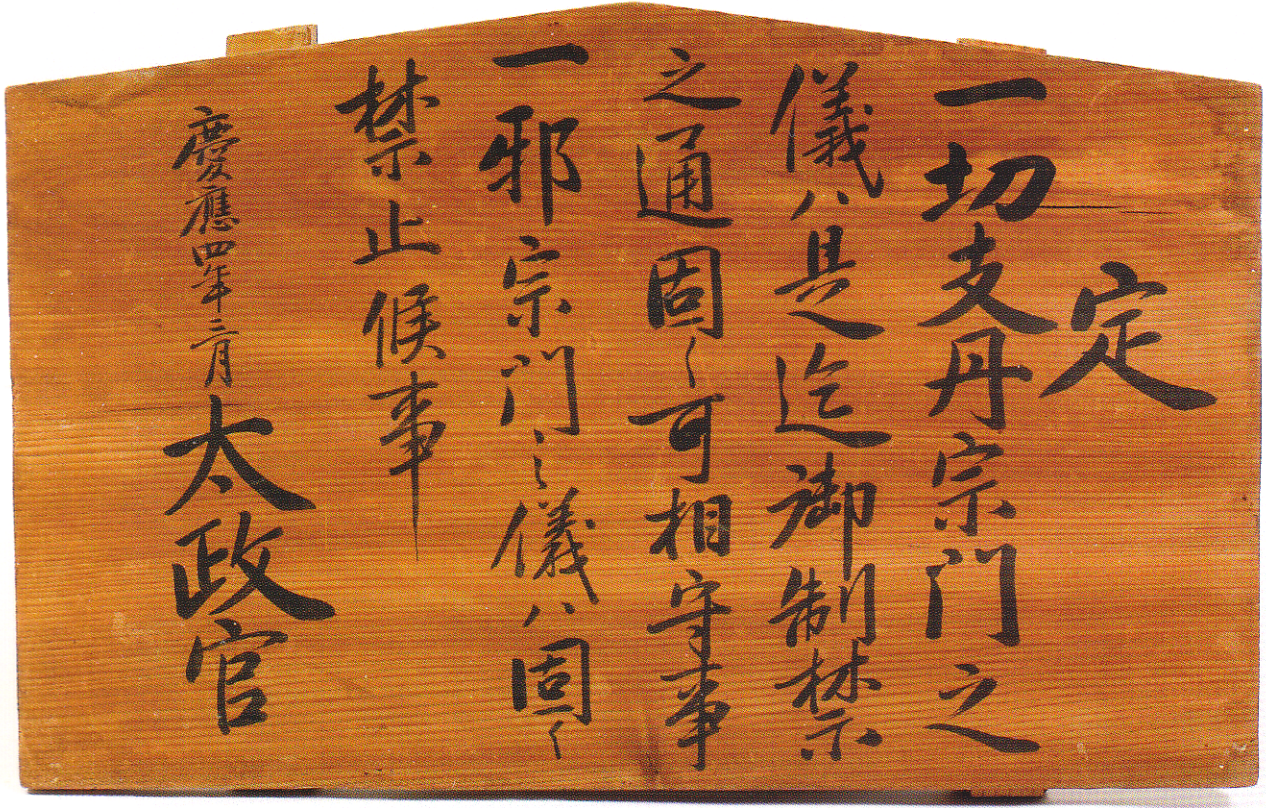
高木仙右衛門ら信徒68人が捕縛され激しい拷問を受けた。

プロイセン公使、フランス領事、ポルトガル公使、アメリカ公使が長崎奉行に抗議。9月21日、この件でフランス公使レオン・ロッシュと将軍徳川慶喜が大坂城で面会。

1868　明治に改元

1868年４月、明治政府は「五榜の掲示」を立ててキリシタン禁制（第三札）を継続、同５月の御前会議にて浦上信徒の流罪を決定、6月に太政官達。以降1870年までに浦上キリシタン3394名が20藩に配流、激しい拷問を受けた。

諸外国からの非難は激化、岩倉使節団も米国大統領、英国女王から非難され、不平等条約改正に不利益と判断するに至った。


一切支丹宗門之
儀、其外御制禁
之通、可相守事
一邪宗門之儀、同
禁止候事
慶應四年三月
太政官

禁教の停止

1871　キリシタン禁制の高札撤去

配流されていた浦上のキリシタン信徒釈放

1873　「五榜の掲示」全て廃止、キリシタン禁制は終わり、流罪となっていた浦上の信徒も帰郷を許された。

配流された者3394名、うち662名が命を落とした。

生き残った信徒たちは1879年、故地・浦上に聖堂（浦上天主堂）を建てた。

3.5 潜伏キリシタンはその後どうなったか

明治維新という大きな変動の時代でもあったため、信徒たちは３つの方向に分かれることとなった。

- ■ カトリック教会へ復帰
- ■ カクレキリシタンを続ける（生月島、他）
- ■ 棄教して仏教・神道に帰依

今回の世界遺産登録にあたって、カクレキリシタンは完全に無視されてしまった。

潜伏キリシタンは、聖職者不在の状態で「水方」と呼ばれる人物が集落内の行事を司っていた。

カクレキリシタンもそれと似ているが、居宅内に仏壇・神棚を設置している家が多く、しかもそれを（偽装ではなく）“それはそれとして” 大切に扱っていた（いる）こと、より日本の民俗信仰に近い形態をもつことが、研究者によって指摘されている。

漁業・農業などの日常的な生業の「暦」との関連によると考えられている。

４．「教会堂」という文化遺産

4.1 長崎・佐世保の教会

外海の出津教会堂（長崎市・1884）マルク・ド・ロ神父
外海の大野教会堂（長崎市・1893）マルク・ド・ロ神父
黒島天主堂（佐世保市・1902）ジョセフ・マルマン神父

4.2 天草の教会

天草の崎津教会（天草市・1934）鉄川与助

4.3 五島の教会

旧野首教会（北松浦郡小値賀町野崎島・1908）鉄川与助
頭ケ島天主堂（南松浦郡新上五島町・1919） 鉄川与助
旧五輪教会堂（五島市久賀島・1881）設計施工者不詳
江上天主堂（五島市奈留島・1918） 鉄川与助

外海の出津教会堂（長崎市・1884）マルク・ド・ロ神父

外海の大野教会堂（長崎市・1893）マルク・ド・ロ神父

黒島天主堂（佐世保市・1902）ジョセフ・マルマン神父

天草の崎津教会
(天草市・1934)
鉄川与助

旧野首教会（北松浦郡小値賀町野崎島・1908）鉄川与助

頭ケ島天主堂（南松浦郡新上五島町・1919） 鉄川与助

旧五輪教会堂（五島市久賀島・1881）設計施工者不詳

江上天主堂（五島市奈留島・1918）　鉄川与助

4.4 鉄川与助

鉄川与助（1879〜1976）は、長崎県を中心に多くの教会堂建築を手がけた長崎県五島出身の大工棟梁・建築家である。

彼は生涯に34の教会の設計・施工に携わり、そのうちの世界遺産に登録された４堂を含む23の教会が現存している。

また登録外ではあるが、青砂ヶ浦天主堂（1910）、今村天主堂（1913）、田平天主堂（1918）は国の重要文化財となっており、紐差教会（1929）は鉄筋コンクリート建築として日本最初期のものである。